

IBM i 2025

IBM i コンテンツ (2025年2月版)

IBM PowerSCを用いたIBM i セキュリティ強化のご紹介

日本アイ・ビー・エム株式会社
テクノロジー事業本部
IBM Powerテクニカルセールス



IBM PowerSCを用いたIBM i セキュリティ強化のご紹介

IBM PowerSCは、IBM i またはAIX/Linuxが稼働しているIBM Powerサーバー上の仮想化環境向けに最適化された、セキュリティーとコンプライアンスのソリューションです。（別途有償のソフトウェア製品になります）

昨年末に、最新のIBM PowerSC (v2.2.0.4) が出荷され、これまで、管理用にAIX/Linuxサーバーが必要であったものが、IBM i だけで、管理用のサーバーとクライアントの兼用が可能になりました。

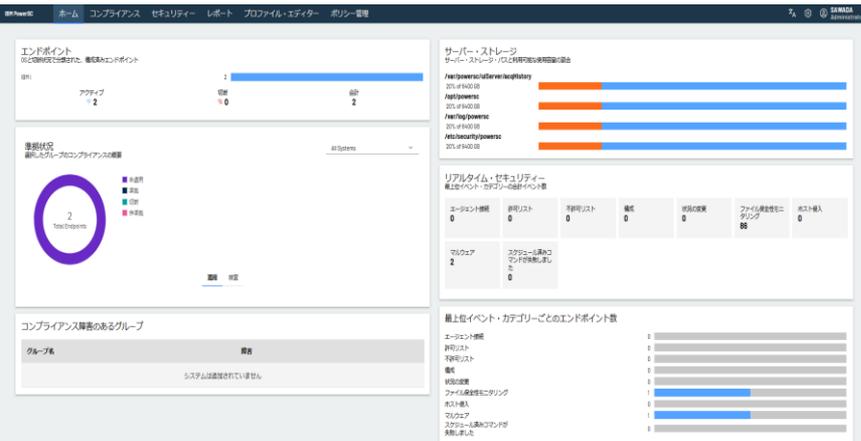
PowerSCには、多くのセキュティ関連の機能がありますが、IBM i のお客様にぜひ活用いただきたい「自動コンプライアンス」、「アンチウイルス(マルウェアの検出)」、「多要素認証」の3つの機能に絞ってご紹介します。

目次

1. IBM PowerSCとは
2. 自動コンプライアンス機能
3. アンチウイルス（マルウェアの検知）機能
4. 多要素認証機能
5. 補足情報

1. PowerSCとは

(1) IBM Powerのセキュリティ管理ツール ~IBM PowerSCとは Web UIによるセキュリティーの一元管理



セキュリティー管理の簡素化・機能の強化

セキュリティー設定の
モニタリングを簡素化

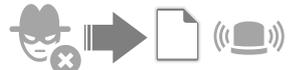


コンプライアンス違反を検出



パッチレベル違反を検知

不正アクセスの
検知機能を強化



ファイル改竄検知



ウィルス・マルウェアを検出

アクセス制御機能の
強化・一元管理



マルウェアからシステムを防御



ワンタイム・パスワード

多要素認証で不正アクセス防止

セキュリティーイベント
発生時の応答の強化



メール送付 ログ出力



スクリプト実行

GUIサーバー エンドポイント

イベント発生時の応答を一元管理・自動化

GUIでセキュリティー設定を一元管理

システム全体のセキュリティー・イベントを表示

イベントの分析レポートも出力可能

解説：

- IBM PowerSC は、IBM i、AIX、Linux を実行する IBM Power サーバー上のOS環境向けに最適化されたセキュリティおよびコンプライアンス・ソリューションです。PowerSCは、Webベースのユーザー・インターフェースを提供し、OSのセキュリティとコンプライアンス機能を補完し、一元管理します。
- コンプライアンスという観点では、主に規制業界向けにあらかじめ構築された**コンプライアンス・プロファイル**を提供することです。顧客はカスタムプロファイルを作成できるため、事前に構築されたプロファイルからルールを引き出して、自社の環境に合わせてカスタマイズしたプロファイルを作成することができます。
- 不正アクセスの検知の観点から、そのシステムを安全に保ち、リアルタイムで監視し、セキュリティを維持するためにさまざまな機能が利用できます。機能には以下のようなものがあります：
ファイル整合性監視は、監視対象ファイルのコンテンツやパーミッションが変更された場合にそれを認識し警告する。
アプリケーションコントロールは、PowerSC のマルウェア対策機能であるカーネルベースの「許可リスト」アプローチです。
ブロック・リスティングは、ハッシュ検索を使用してファイル・レベルで一連のウイルス・シグネチャを検索する脅威ハンティング機能です。その中には、トロイの木馬、ウイルス、マルウェア、その他の悪意のある脅威を検出するためのオープンソースの**ウイルス対策エンジンである ClamAV のマルウェア対策**が含まれています。
- アクセス制御機能の観点からは、**多要素認証**が利用できます。名前が示すように、多要素認証はユーザーを識別する2つ以上の要素を活用します。今、多要素認証は、大変注目されています。その理由は、不正やなりすましを防ぐ手段として、従来のパスワード認証よりも優れているからです。

1. PowerSCとは

(2) PowerSCフィーチャーの、OS毎に使える機能

機能	対応しているOS
コンプライアンスの自動化	✓ AIX, Linux, IBM i
コンプライアンス・レポート機能 (タイムラインを含む)	✓ AIX, Linux, IBM i
ファイル整合性監視	✓ AIX, Linux, IBM i
許可リスト / アプリケーションの制御	✓ AIX & Linux
ブロックリスト/脅威ハンティング (ハッシュ検索)	✓ AIX, Linux, IBM i
マルウェア対策 (ウイルスDB)	✓ AIX, Linux, IBM i
IBMセーフガードコピーとの統合	✓ AIX, Linux, IBM i
パッチ管理	✓ AIX, Linux, IBM i
エンドポイント検知とレスポンス (EDR)	✓ AIX, Linux, IBM i
侵入検知システム & 防御 / ファイアウォール (EDR)	✓ AIX & Linux
ログ検査と分析 (EDR)	✓ AIX, Linux, IBM i
異常検知、相関、インシデント・レスポンス (EDR)	✓ AIX, Linux, IBM i
レスポンス/アクション・トリガー (EDR)	✓ AIX, Linux, IBM i
イベント・コンテキストとフィルタリング (EDR)	✓ AIX, Linux, IBM i
多要素認証 (MFA)	✓ AIX, Linux, IBM i

解説：

- ・ IBM PowerSC は、AIX、IBM i、Linux を実行する IBM Power サーバー上の仮想化環境向けに最適化されたセキュリティおよびコンプライアンス・ソリューションですが、OS毎に使用できる機能に制限があります。AIXとLinuxについては全機能を使用することができますが、IBM iをPowerSCクライアント（エンドポイント）にする場合は、

ー許可リスト・アプリケーション制御

ー侵入検知システム・防御・ファイヤーウォール

の2つの機能は、現時点（2025/02のPowerSC v2.2.0.4）では使用することができません。

- ・ ただし、アプリケーション制御（ファイルごとのアクセス権の制御）や、侵入検知や防御についてもIBM iの標準機能で利用できます。
（詳しくは下記を参照してください）

https://www.jbcc.co.jp/products/files/ibmpowercolumn_202409.pdf

- ・ それぞれのPowerSCの機能の概要については下記を参照してください。
<https://www.ibm.com/docs/ja/powersc-standard/2.2?topic=concepts>

1. PowerSCとは

(3) PowerSCで活用したいIBM iユーザー向けの機能

多くのお客様が心配されている以下のようなリスクに対してPowerSCは威力を発揮します。

リスク	PowerSCの機能
自社のセキュリティー・ルールがIBM i 区画で実施されてるのかわからない！	<ul style="list-style-type: none">• コンプライアンスポリシーのチェックと適用• インタラクティブタイムラインレポート• パッチ管理• セキュリティ/コンプライアンス・ダッシュボードでのわかりやすい状況表示
ランサムウェア でデータを失ったり、不正なアプリケーションで被害を受けるかも？	<ul style="list-style-type: none">• Endpoint Detection and Response (EDR)• アンチウイルス機能(マルウェアの検出)• ファイル・インテグリティ・モニタリング
ユーザーID/パスワードの流出で、 不正アクセス があるかも	<ul style="list-style-type: none">• MFA(多要素認証)のサポート

解説：

・PowerSCでは、IBM iの標準機能にない、様々なメリットをもたらします。特に、お客様で不安に思われている、下記の3点について、この資料で解説していきます。

1. 自社のセキュリティー・ルールがすべてのIBM i 区画で適用されているかわからない、というお客様のために、セキュリティーの設定が自社のコンプライアンスにあっているかどうかを自動的に点検する機能があります。IBM i のお客様向けには、IBMiベストプラクティスというセキュリティー・プロファイルテンプレートが用意されています。
2. ランサムウェア対応は、全てのお客様に求められています。IBM iでは、ライブラリー・オブジェクトが感染することはないですが、IFSを社内に公開している場合には、マルウェアの保菌者になる可能性があります。PowerSCには、このマルウェアを検出する機能を利用できます。
3. 正規のユーザーID/パスワードが、流出する事案が増えています。正規のパスワード流出した際にも安心・安全な、多要素認証の機能を使用できます。

2. 自動コンプライアンス機能

(1) 自動コンプライアンス機能とは

- ✓ 業界標準の規制遵守のためには、システムのセキュリティを統一的に設定する必要がある。特定の規格を理解し、適用するのは面倒で、時間がかかり、ミスを犯しやすい。
- ✓ PowerSCの「自動コンプライアンス機能」は、業界標準をサポートするためにあらかじめ設定されたコンプライス・プロファイルを提供し、これを適用して、自動的に検査する機能を提供する（次ページにOSごとに適用できるプロファイル一覧）
- ✓ OS毎に提供されているコンプライアンス・プロファイルに準拠しているか「シミュレート」して、自社のOSセキュリティ設定が、それに準拠しているか確認できます。また、強制的にセキュリティ設定を適用して、業界標準のコンプライアンス基準に準拠するように変更することもできます。定期的にコンプライアンス状況を検査することで、基準を満たさない設定に変更された時に、アラートを上げることができます。コンプライス・プロファイルは、自社コンプライアンスに合わせてカスタマイズすることもできます。

2. 自動コンプライアンス機能

(2) 提供されているコンプライアンス・プロファイル

PowerSCは、以下の規格について、セキュリティーおよびコンプライアンス構成の設定のシミュレート、適用、検査を自動化します。OS毎に用意されています。

AIX プロファイル

GDPR

PCI

CIS

HIPAA

NERC

DoD STIG

SAP Hardening

Oracle Systems Hardening



コンプライアンス

Linux プロファイル

GDPR

PCI

SAP Hardening

CIS

HMC Hardening

IBM i プロファイル

IBM i ベストプラクティス

CIS

解説：

・PowerSC 製品には、OS毎に、組み込みプロファイルが付属しています。これらのプロファイルを使用して、各エンドポイントがセキュリティー標準を満たすようにシステム・エンドポイントを構成することができます。

- Payment Card Industry - Data Security Standard (PCI-DSS) への準拠
- Payment Card Industry-Data Security Standard Compliance (PCI) for Linux®
- Sarbanes-Oxley 法令および COBIT への準拠 (SOX-COBIT)
- 米国国防総省 (DoD) STIG への準拠
- 医療保険の積算と責任に関する法律 (HIPAA) (Health Insurance Portability and Accountability Act (HIPAA))
- 北米電力信頼度協議会 (NERC) への準拠
- 一般データ保護規則 (GDPR) への準拠
- 一般データ保護規則 (GDPR) への準拠 (Linux)
- AIX® の SAP コンプライアンス・プロファイル
- Linux の SAP HANA 準拠
- AIX および Linuxの Internet Security ベンチマーク・コンプライアンスのセンター。
- Center for Internet Security IBM® i ベンチマーク**
- IBM i のベスト・プラクティス**

それぞれの組み込みプロファイルには、セキュリティー要件を満たすために、エンドポイントに適用される必要があるルールが入っています。これらのルールの一部のみまたは別の組み合わせを適用するか、またはコンプライアンス・レベルをカスタマイズする必要がある場合、カスタム・プロファイルを作成できます。ほとんどの環境で、問題となっているルールを除去するために、管理者はコンプライアンス・ファイルを頻繁に編集します。互換性チェックが完了した後、コンプライアンス・ルール・ファイルは安定したものと見なされ、実動サーバーにデプロイされます。

2. 自動コンプライアンス機能

(3) IBM iで提供されているベスト・プラクティス

IBM iのシステムを保護するためのコンプライアンス・プロファイルとして「IBM iベスト・プラクティス」が提供されます。設定値はマニュアルに記載されています。

<https://www.ibm.com/docs/ja/powersc-standard/2.2?topic=concepts-i-best-practices>

The screenshot shows the IBM i documentation page for 'IBM i システムを保護するためのベスト・プラクティス'. The page includes a search bar, a navigation menu on the left, and the main content area. The main content area contains the title, a version number (2.2), a last updated date (2024-01-17), and a table of best practices.

IBM i システムを保護するためのベスト・プラクティス

最終更新: 2024-01-17

IBM iのベスト・プラクティスは、IBM iシステムを保護するための推奨システム構成を自動化します。

表1では、IBM iシステムを保護するためのベスト・プラクティスについて説明します。

表 1. IBM iのベスト・プラクティスに関連する設定

グループ	説明	設定を変更するスクリプトの場所
システム全体のアクセス制御	オブジェクトがライブラリーに作成されるときに使用されるデフォルトの共通権限を設定します。オブジェクト作成コマンドのAUTキーワードの*LIBCRTAUT値を使用してオブジェクトの共通権限を設定する場合、オブジェクトが作成されるライブラリーのCRTAUT値によって、そのオブジェクトに使用される共通権限が決まりま	/etc/security/pscxpert/bin/workssystemvalue 引数: QCRTAUT *USE

解説：

- IBM i用に提供されている、コンプライアンス・プロファイルは、「IBM i ベスト・プラクティス」と「CIS」のみです。IBM i ベスト・プラクティスについては、マニュアルに全設定値をみることができます。この値を参考にしてOS設定をするとより強固なセキュリティ設定になります。
- Center for Internet Security (CIS) は、ターゲットシステムの安全な設定のためのベンチマークを開発しています。CIS ベンチマークは、政府、企業、産業界、および学界によって開発され、受け入れられている、コンセンサスに基づくベストプラクティスのセキュリティ構成ガイドです。詳しくは下記URLを参照してください。 <https://www.ibm.com/jp-ja/topics/cis-benchmarks>
- IBM i用の「CIS」は、バージョン毎に設定されていて、IBM i 7.4と7.5のコンプライアンス・プロファイルが用意されています。それぞれの設定値は、下記マニュアルに掲載されています。
 - IBM i 7.4
<https://www.ibm.com/docs/ja/powersc-standard/2.2?topic=concepts-center-internet-security-i-v7r4m0-benchmark>
 - IBM i 7.5
<https://www.ibm.com/docs/ja/powersc-standard/2.2?topic=concepts-center-internet-security-i-v7r5m0-benchmark>

2. 自動コンプライアンス機能

(4) IBM iで提供されているベスト・プラクティスを使った「シミュレート」機能を使ってみよう

①PowerSCのメインメニューから、「コンプライアンス」を選択すると、下記のように登録されたIBM i区画が表示されます。

②IBM i区画を選択すると、下記のように「適用」「シミュレート」「検査」などのメニューが表示されます。

IBM PowerSC Home **コンプライアンス** セキュリティ レポート プロファイル・エディター ポリシー管理 SAWADA Administrator

すべてのシステム 2個のシステム

検索された合計ルール数 0 失敗したルール・チェックの合計 0 適用されたルールの合計 0 失敗したルール適用の合計 0

システム名	OS	最終適用済みタイプ	タイムスタンプの適用	タイムスタンプの検査	検査に合格しました	チェックに失敗しました	ステータスの確認
<input type="checkbox"/> DEMO00	IBM i	該当なし	🕒	-	-	-	-
<input type="checkbox"/> HONBAN.MAKUHARI.JAPAN.IBM.COM	IBM i	該当なし	🕒	-	-	-	-

すべてのシステム 2個のシステム

検索された合計ルール数 0 失敗したルール・チェックの合計 0 適用されたルールの合計 0 失敗したルール適用の合計 0

適用 シミュレート 元に戻す 検査 スケジュール Manage Exemptions 検索

システム名	OS	最終適用済みタイプ	タイムスタンプの適用	タイムスタンプの検査	検査に合格しました	チェックに失敗しました
<input type="checkbox"/> DEMO00	IBM i	該当なし	🕒	-	-	-
<input checked="" type="checkbox"/> HONBAN.MAKUHARI.JAPAN.IBM.COM	IBM i	該当なし	🕒	-	-	-

2. 自動コンプライアンス機能

(4) IBM iで提供されているベスト・プラクティスを使った「シミュレート」機能を使ってみよう

- ③ここで「シミュレート」を選択すると下記のように利用できるコンプライス・プロファイルが表示されます。(IBM iの場合は下記の3つ) 一番上の「IBMi_best_practices」を選択し、「はい」を選択します。

1エンドポイントでシミュレートするプロファイルを選択してください

組み込みプロファイル

IBMi_best_practices.xml

IBMi_CIS.xml

IBMi_CIS75.xml

カスタム・プロファイル

使用可能なカスタム・プロファイルがありません。

キャンセル はい

- ④しばらく待つと、シミュレート結果が、下部に、「失敗したルール」「合格したルール」などと表示されます。ここで、どの部分がルールに適していないかを確認できます。

<input type="checkbox"/> システム名	OS	最終適用済みタイプ	タイムスタンプの適用
<input type="checkbox"/> DEMO00	IBM i	該当なし	-
<input checked="" type="checkbox"/> HONBAN.MAKUHARI.JAPAN.IBM.COM	IBM i	該当なし	-

シミュレートされた IBMiBP

失敗したルール:

- 2025/2/3 12:46:07 IBMiBP_QCRTAUT:
Compliance check for system value QCRTAUT failed. System value should have value *USE but has value *CHANGE.
- 2025/2/3 12:46:07 IBMiBP_QPWDCHGBLK:
Compliance check for system value QPWDCHGBLK failed. System value should have value 24 but has value *NONE.

2. 自動コンプライアンス機能

(4) IBM iで提供されているベスト・プラクティスを使った「シミュレート」機能を使ってみよう

⑤最初のメニューで「レポート」を選択すると下記のように先ほど実行したコンプライアンスの「シミュレート」結果の詳細レポートが表示できます。

⑥イベント・タイプで、[Check]を選択すると「合格数」「不合格数」の集計値が表示できます。ここでは、合格数17、不合格数19でした。

緊急度	イベント・カテゴリ	イベント・タイプ	タイム・スタンプ
△ 低	コンプライアンス	コンプライアンス・ルールの失敗	2025/2/3 12:52:25
△ 低	コンプライアンス	Check	2025/2/3 12:52:25
△ 低	コンプライアンス	コンプライアンス・ルールの失敗	2025/2/3 12:52:14
△ 低	ファイル健全性モニタリング	ファイル /tmp/.com_ibm_tools_attach/56112 のアクセスが必要されました	2025/2/3 12:52:09
△ 低	コンプライアンス	コンプライアンス・ルールの失敗	2025/2/3 12:52:09
△ 低	コンプライアンス	コンプライアンス・ルールの失敗	2025/2/3 12:52:09
△ 低	コンプライアンス	コンプライアンス・ルールの失敗	2025/2/3 12:51:45
△ 低	コンプライアンス	コンプライアンス・ルールの失敗	2025/2/3 12:51:44
△ 低	コンプライアンス	コンプライアンス・ルールの失敗	2025/2/3 12:51:44

緊急度	イベント・カテゴリ	イベント・タイプ
△ 低	コンプライアンス	コンプライアンス・ルールの失敗
△ 低	コンプライアンス	Check

2025/2/3 12:52:25	
操作	checkByProfile
コンプライアンス・レベル	IBMIBP
コンプライアンス状況	不合格
合格数	17
不合格数	19

2. 自動コンプライアンス機能

(4) IBM iで提供されているベスト・プラクティスを使った「シミュレート」機能を使ってみよう。

⑦失敗したルールが一番上に、システム値「QCRTAUT」の値が*CHANGEになっているので、ここは*USEにすべきと指示がありました。

シミュレートされた IBMiBP

失敗したルール:

❗ 2025/2/3 13:03:57 IBMiBP_QCRTAUT:
Compliance check for system value QCRTAUT failed. System value should have value *USE but has value *CHANGE.

⑧システムを*USEに変更してみます。

```

システム値変更
システム値          : QCRTAUT
記述                : 省略時共通権限の作成

選択項目を入力して、実行キーを押してください。

省略時共通権限の作成  *USE      *CHANGE
                       *ALL      *USE
                       *EXCLUDE
  
```

⑨再度、「シミュレート」を実行して、レポートの詳細をみると合格が18で不合格が18になり、合格が1つ増えました。

このように、シミュレータ結果の「失敗したルール」の詳細を見て、自社環境のセキュリティ・レベルを少しずつ改善していくことができます。

△ 低	コンプライアンス	Check
2025/2/3 13:10:50		
操作	checkByProfile	
コンプライアンス・レベル	IBMiBP	
コンプライアンス状況	不合格	
合格数	18	
不合格数	18	

解説：

- ここでは、自動コンプライアンスの「シミュレート」の機能を解説しました。それ以外の機能としては「適用」を実行すると、該当のIBM iのシステムに対して、強制的に、プロファイルの設定を適用する機能があります。「適用」すると、システム値や、TCPIPの設定値が強制的に変更されますが、失敗する値もあります。（手動での変更が必要なシステム値もあります）「適用」するのは、稼働中のシステムの大きな影響があるので、テスト環境などで十分テストを行ってから本番環境で実施してください。
- 推奨されるのは、「シミュレート」で、失敗した設定値を確認してから、1つずつ手動で変更することです。セキュリティ関連のマニュアルを熟読しながら実施してください。
- PowerSCで提供されているオリジナルのコンプライス・プロファイルが自社に合わない場合には、カスタムプロファイルを作成することもできます。（ルールが必要かどうか検討してください）
- 「検査」機能は、コンプライス・プロファイルを適用した場合に、その適用したプロファイルに値があっているかを検査する機能です。スケジューラーで定期的に検査する機能があるので自社のコンプライス・プロファイルにあった設定になっているかを確認することができます。

3. アンチウイルス（マルウェア検知）機能

（1）IBM i上でマルウェア検出が必要な理由

- ✓ 他のプラットフォーム(Windows, x86 Linux等) と比べて、Power上で稼働するIBM iに 対するサイバー攻撃頻度やPowerアーキテクチャー上で実行されるマルウェアの報告数を 対 少 なく抑えられています。
- ✓ しかし、他プラットフォームのサーバーやPCから IBM i上のIFS(統合ファイルシステム) ファイルにはアクセスできるため、IBM i **自身がマルウェアキャリア**となり、気づかないうちに**周辺システムにマルウェアを拡散**してしまうリスクがあります。
- ✓ たとえIBM iでは実行されないマルウェアであったとしても、周辺システムへの影響を拡大させないために、**IBM i上でもマルウェアそのものを検知**することが重要です。

3. アンチウイルス（マルウェア検知）機能

（2）PowerSCで稼働するアンチウイルス・エンジン：ClamAV

ClamAVとは？

- ✓ トロイの木馬、ウイルス、マルウェア、およびその他の悪意のある脅威を検出するためのオープン・ソースのアンチウイルス・エンジン

- ✓ PowerSC GUI を使用して、PowerSC GUI エージェント(AIX、IBM i、Linux) 上に導入されている ClamAV に対して以下の操作が可能
 - スキャン設定
 - スキャンの実行（+スケジューリング）
 - レポート出力（+メール送付）

ClamAVの詳細は、下記参照

<https://www.clamav.net/about>

解説：

- PowerSCには、トロイの木馬、ウイルス、マルウェア、その他の悪意のある脅威を検出するためのオープンソースのウイルス対策エンジンであるClamAVのマルウェア対策サポートが含まれています。
- ClamAV は、検出されたマルウェアを PowerSC エンドポイント上の隔離ディレクトリに移動またはコピーし、タイムスタンプ付きの接頭辞を付けて、ファイルのパーミッションを無効にして、開いたり使用したりできないようにします。
- IBM i上にClamAVをインストールするためには、いくつかの前提ソフトウェアが必要です。詳細は下記を参照してください。（*事前にいくつかのオープンソース導入が必要です）
<https://www.ibm.com/docs/ja/powersc-standard/2.2?topic=i-anti-malware-installation-requirements>

3. アンチウイルス（マルウェア検知）機能 (3) ClamAVによるマルウェアスキャンの設定と実行

- ①PowerSC GUIのメインメニューから、「セキュリティ」を選択し、登録されたIBM i 区画が表示されます。アンチウイルス設定をしたい、IBM i 区画(ここではDEMO00)を選択し、「アクション」->「マルウェア」->「マルウェアの構成」をクリックします。

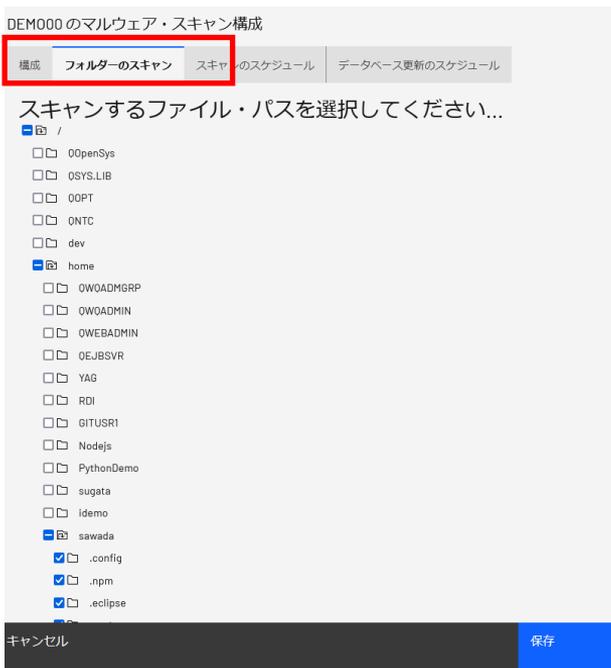
The screenshot shows the IBM PowerSC GUI interface. The top navigation bar includes 'ホーム', 'コンプライアンス', 'セキュリティ', 'レポート', 'プロファイル・エディター', and 'ポリシー管理'. The 'セキュリティ' menu is highlighted with a red box. Below the navigation bar, the page title is 'すべてのシステム 2個のシステム'. The main content area displays a table of system events and a summary of event counts. The 'マルウェア' (Malware) count is 2. A dropdown menu is open for the 'マルウェア' section, with 'マルウェアの構成' (Configure Malware) highlighted with a red box. Below the summary, a table lists systems with columns for 'システム名' and 'OS'. The system 'DEMO00' is highlighted with a red box. The 'アクション' (Action) dropdown menu is also visible, showing options like 'マルウェアの構成' and 'マルウェア・スキャンの実行'.

システム名	OS
> DEMO00	IBM i
> HONBAN.MAKUHARI.JAPAN.IBM.COM	IBM i

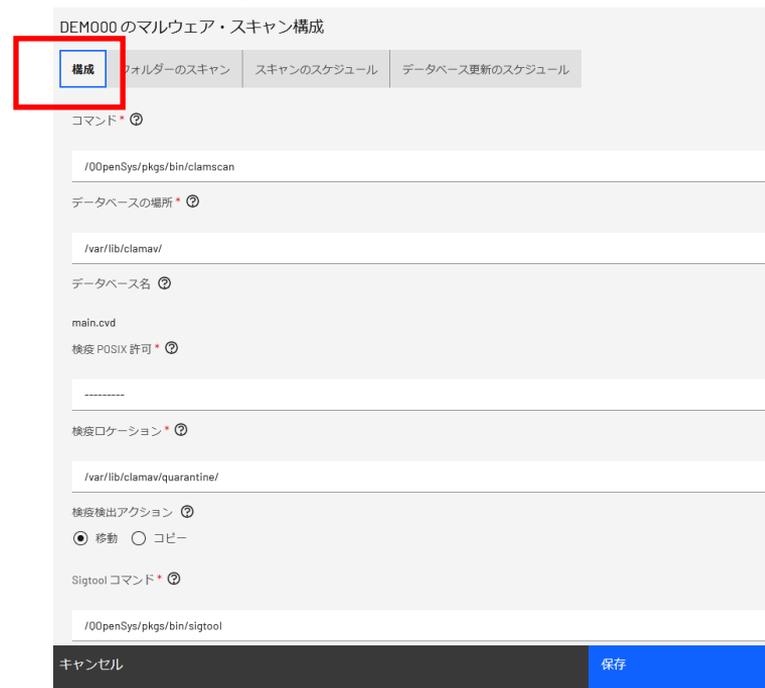
3. アンチウイルス（マルウェア検知）機能

（3）ClamAVによるマルウェアスキャンの設定と実行

- ② 「フォルダーのスキャン」タブを選択します。
スキャン対象のディレクトリーを選択します
(下記例では/home/sawada を選択しています)



- ③ 「構成」タブを選択します。（この設定は clamAVのエンドポイントの導入時の設定に合わせます。（基本的には自動設定）



3. アンチウイルス（マルウェア検知）機能

（3）ClamAVによるマルウェアスキャンの設定と実行

- ④ 「スキャンのスケジュール」タブを選択します。
「自動スキャン」をオンにします。
スケジュール・タイプを設定し、
スケジュール設定して、保存します。
(下記例では2/4 14:00 を選択しています)

DEM000のマルウェア・スキャン構成

構成	フォルダのスキャン	スキャンのスケジュール	データベース更新のスケジュール
自動スキャン	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

スケジュール・タイプ
 1回 毎時 日次 毎週 月次 月末

開始日 時刻 分

サーバ(時刻は0:1:56進んでいます)

Eメール・レポートを送信しますか?
 いいえ

キャンセル

- ⑤ (参考) スケジュール時間になると、ClamAVのスキャンが稼働します。
下記のように、ユーザー（QIBMPSC）で稼働しています。

システム活動の処理

DEM000 25/02/04 13:59:10

```

自動最新表示 (秒数) . . . . . 5
ジョブ / タスク CPU フィルター . . . . . 10
経過時間 . . . . . 00:00:00 平均 CPU 使用率 . . . . . 22.0
仮想プロセッサ . . . . . 2 最大 CPU 使用率 . . . . . 44.0
全般 SQL CPU 使用率 . . . . . 0 最小 CPU 使用率 . . . . . 0
平均 CPU 速度 . . . . . 101.7 現行処理容量 . . . . . 1.00
  
```

オプションを入力して、実行キーを押してください。
 1= ジョブのモニター 5= ジョブの処理

OPT	ジョブ / タスク	ユーザー	番号	スレッド	PTY	CPU UTIL	トータル SYNC I/O	トータル ASYNC I/O	SQL CPU UTIL
-	QJVAEXEC	QIBMPSC	248778	0000078F	10	20.9	1430	436	.0
-	QPADEV0001	SAWADA	248779	00000C31	1	.2	0	0	.0

3. アンチウイルス（マルウェア検知）機能

（3）ClamAVによるマルウェアスキャンの設定と実行

⑥ スキャンが完了すると、下記のように、開始と完了のログが表示されます。



▼ DEMO00 IBM i

イベント

- 1 マルウェア：スキャンが開始しました
- 1 マルウェア：スキャンが完了しました

⑦ 「マルウェア・スキャンが完了しました」の行をクリックすると下記のように詳細が表示されます。例では、スキャンされたファイルは3010個で感染したファイルは0でした。



詳細

2025/2/4 14:06:58

フォルダーのスキャン	/home/sawada/.config:/home/sawada/.npm:/home/sawada/.eclipse:/home/sawada/.cache:/home/sample.html:/home/sawada/DSPSYSSTS.py:/home/sawada/SOLDEMO.py:/home/sawada/.bash_hisawada/row.tpl:/home/sawada/query.tpl:/home/sawada/SAMPLE.py:/home/sawada/cmd.tpl:/home/var/log/clamav/clamav-scan-2025-02-04_01-55-31.log
既知のウイルス	8703762
エンジンのバージョン	0.103.11
スキャンされたディレクトリー	3562
スキャンされたファイル	3010
感染したファイル	0
スキャンされたデータ	393.06 MB
読み取られたデータ	71.11 MB (ratio 5.53:1)
時刻	686.415 sec (11 m 26 s)

キャンセル イベントを非表示にする

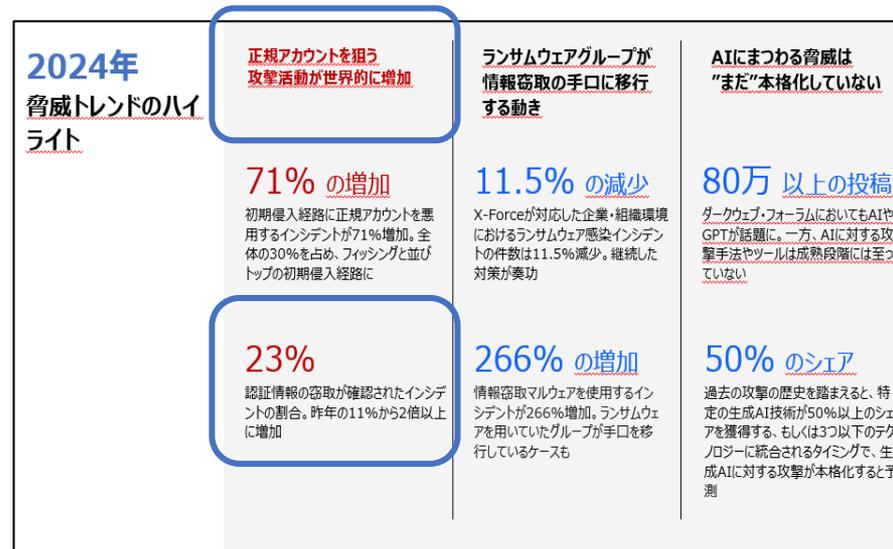
4. 多要素認証機能

(1) 多要素認証機能が注目されている理由

- ランサムウェアなどの外部攻撃や内部不正等による情報漏洩リスクが増加傾向にあります。
- 上記の対策として今、**多要素認証(Multi-Factor Authentication : MFA)**が注目されています。

身近なところでの「多要素認証」の例：

- ✓ 銀行アプリでの「ワンタイム・パスワード」
- ✓ オンラインクレジットカード決済での「ワンタイム・パスワード」



IBM : <https://www.ibm.com/jp-ja/reports/data-breach>

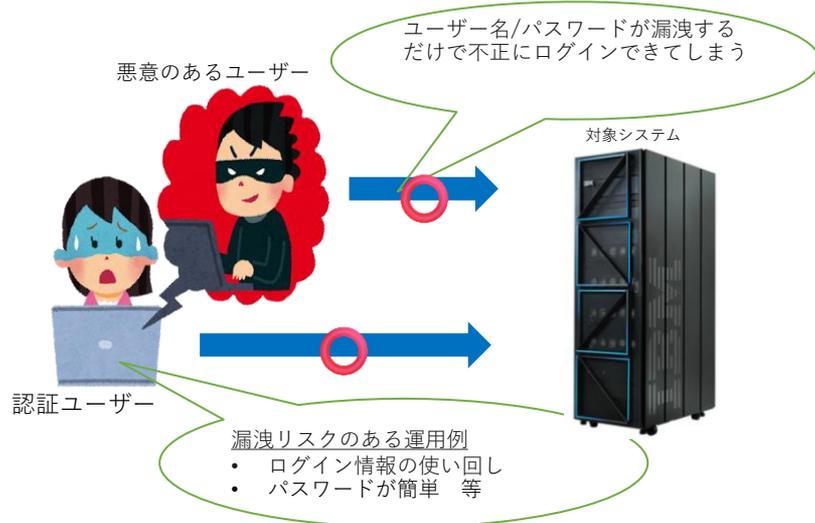
解説：

- ・ランサムウェア被害のニュースを頻繁に耳にします。公開されていないものも数多くあると思われます。IBMが毎年発表している「データ侵害のコストに関する調査2024」（下記のリンク参照）によると「データ侵害コスト」の平均額は前年比10%増の488万ドル（約7億円）で、過去最高額を記録しました。<https://www.ibm.com/jp-ja/reports/data-breach>
- ・調査レポートによると、正規アカウントを狙う攻撃活動が世界的に増加しています。認証情報の窃取が確認されたインシデントの割合は23%と昨年の11%から2倍以上に増加しています。
- ・またレポートによると、認証情報が盗まれたか、悪意のあるインサイダーによって使用されたかを問わず、攻撃の特定と封じ込めにかかる時間が増加し、平均合計時間はそれぞれ292日と287日となりました。防御側は、ネットワーク上の正当なユーザー活動と悪意のあるユーザー活動を区別する必要があるため、脅威の特定が余計に困難でした。
- ・通常のパスワード認証のみではリスクが高いため、近年では多要素認証が注目されるようになりました。2種類以上の異なる認証要素を利用する多要素認証は、第三者による不正アクセスをされにくく、セキュリティを高めることができます。

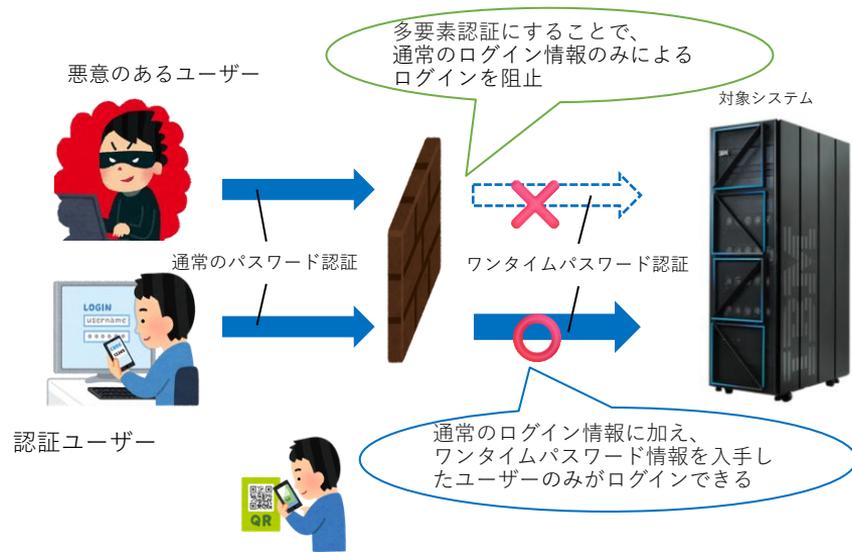
4. 多要素認証機能

(2) もしOSログインに多要素認証を実装しないと・・・

多要素認証がない場合のログイン例



多要素認証を実装した場合のログイン例



多要素認証をOSログインに利用することで、ログイン情報流出による不正アクセスを阻止できます！

4. 多要素認証機能

(3) PowerSC MFAで用いられる多要素認証方式

- ✓ 5250アプリケーション実行時に、IBM i ユーザープロフィールによるサインオン時に、パスワードによる認証方式を組合わせた多要素認証（二要素認証）を実装することが可能です。
- ✓ PowerSCでは主要な認証方式が利用できます。

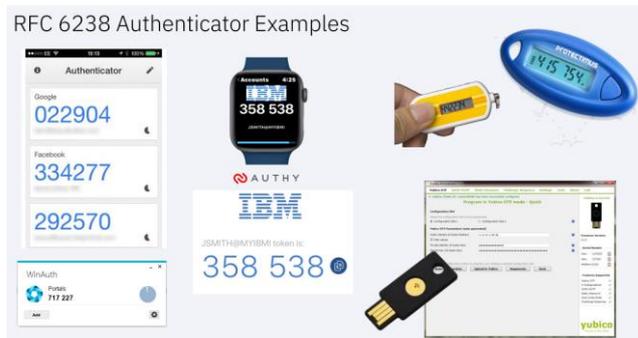
名前
PIV/CAC or X.509 Certificate
LDAP Simple Bind
Password Authentication
Generic RADIUS
Thales SafeNet RADIUS
RSA SecurID Authentication API
RSA SecurID RADIUS
Time-based One Time Password (TOTP)
Yubico OTP



- ✓ この後のIBM iの例では、Webでよく使われる認証方式である、Time-Based One-Time Password (TOTP)アルゴリズムを利用しています。

解説：

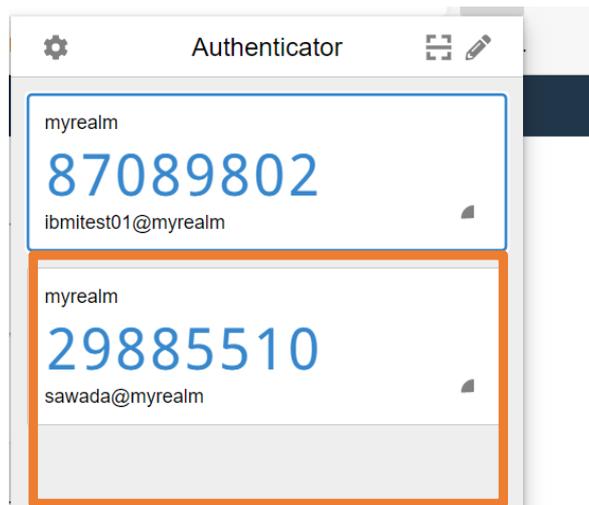
- PowerSCで利用できる認証方式の詳細については下記を参照してください。
<https://www.ibm.com/docs/en/powersc-mfa/2.2?topic=mfa-configuring-powersc-authentication-methods>
- PowerSCのTOTPの仕様はRFC6238に詳細が記述してあります。
<https://tex2e.github.io/rfc-translater/html/rfc6238.html>
- RFC 6238は、Microsoft、Google、Facebook、Symantec、およびAmazonなどで採用されています。
- RFC 6238は2要素実装の基礎としてのWebサービスで、この幅広い採用により、オーセンティケーターには以下のような多くのオプションがあります
 - Windows WinAuth、1Password、KeePass、Yubico
 - Mac OS (OS X) 1Password、KeePass
 - iOS (およびApple Watch) Google Authenticator、Microsoft Authenticator、Authy
 - Android (およびAndroid Wear) Google Authenticator、Microsoft Authenticator、Authy
 - ハードウェアトークンProtectimus
 - その他



4. 多要素認証機能

(4) 多要素認証を使ったサインオンを試みよう

- ① ブラウザーのGoogle Authenticatorで認証用のトークンを取得
(下記例では、ブラウザーの拡張機能を使って、ユーザーID：SAWADA用の8桁の認証トークンを取得)



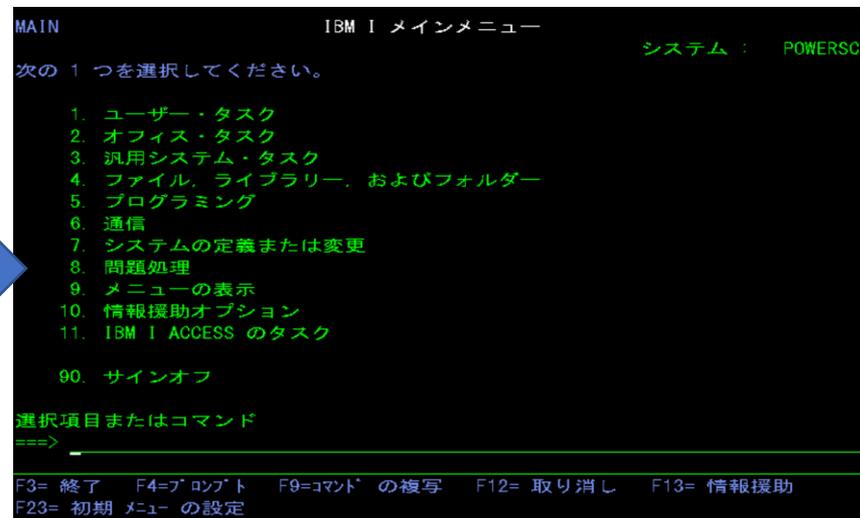
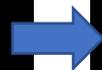
- ② PowerSCの多要素認証サーバーに接続し、IBM iのユーザーIDと認証トークンを入力し、送信をクリックする。
そうすると、認証完了し、キャッシュトークンを受け取れる。これがIBM iのパスワードになる。



4. 多要素認証機能

(4) 多要素認証を使ったサインオンを使ってみよう

- ③ 「このCTCをクリップボードにコピー」
して、5250画面のパスワードに張り
付けサインオンします。



IBM PowerSCを用いたIBM i セキュリティ強化のまとめ：

- ✓ IBM PowerSCは、**業界標準コンプライアンス**に準拠しているか確認するために、事前構成されたコンプライアンス・プロファイルを提供します。IBM iでは、**ベストプラクティスのコンプライアンス・ルール**に準拠しているか確認し、適用できます。
- ✓ IBM i上に影響がないマルウェアの場合でも、IFSを介して周辺の他システムに影響を及ぼす可能性があるため、**IBM i 上でもマルウェアを検知する仕組み**を実装することは重要です。PowerSCではClamAVによるウィルス検知が可能です。
- ✓ パスワード流出等による不正ログインやなりすましを防ぐ手段として、従来のパスワード認証よりも優れているという理由から、**多要素認証**が大きく注目を集めています。PowerSCは、**IBM iの5250ログインに対しても多要素認証を実装**することができます。

5. 補足情報

1. IBM PowerSCのホームページ(無料評価版もここから取得できます)
<https://www.ibm.com/jp-ja/products/powersc>
2. IBM PowerSC 2.2 のマニュアル
<https://www.ibm.com/docs/ja/powersc-standard/2.2>
3. IBM PowerSCご紹介動画 (英語)
<https://video.ibm.com/recorded/134043019>
4. IBM Power Security Catalog (redbook : 英語)
<https://www.redbooks.ibm.com/abstracts/sg248568.html>

IBM i 関連情報 (2025/02/03 更新)

IBM i ポータル・サイト

<https://ibm.biz/ibmijapan>

i Magazine (IBM i 専門誌。春夏秋冬の年4回発刊)

<https://www.imagazine.co.jp/IBMi/>

IBM i World 2024 オンデマンド・セミナー

<https://video.ibm.com/recorded/133917616>

IBM i World 2023 オンデマンド・セミナー

<https://ibm.biz/ibmiworld2023>

IBM i World 2022 オンデマンド・セミナー

<https://video.ibm.com/recorded/132423205>

月イチIBM Power情報セミナー「IBM Power Salon」

<https://ibm.biz/power-salon>

IBM i 関連セミナー・イベント

<https://ibm.biz/powerevents-i>

IBM i Club (日本のIBM i ユーザー様のコミュニティー)

<https://ibm.biz/ibmiclubjapan>

IBM i 研修サービス (i-ラーニング社提供)

<https://www.i-learning.jp/service/it/iserries.html>

IBM TechXchange Powerユーザーコミュニティー (日本)

<https://ibm.biz/ibm-power-user-community>

IBM i RiSING - IBM i 若手技術者コミュニティー

<https://ibm.biz/ibmirising2025>

これから使う人のためのIBM i入門ガイド

<https://www.imagazine.co.jp/imagazine-7071/>

IBM i 情報サイト iWorld

<https://ibm.biz/iworldweb>

IBM i 製品とサポートのロードマップ

<https://ibm.biz/ibmiroadmap2024>

IBM i 7.5 技術資料

<https://www.ibm.com/docs/ja/i/7.5>

IBM Power ソフトウェアのダウンロードサイト (ESS)

<https://ibm.biz/powerdownload>

Fix Central (HW・SWのFix情報提供)

<https://www.ibm.com/support/fixcentral/>

IBM My Notifications (IBM IDの登録 [無償] が必要)

「IBM i」 「9105-41B」 などPTF情報の必要な製品を選択して登録できます。

<https://www.ibm.com/support/mynotifications>

IBM i 各バージョンのライフサイクル

<https://www.ibm.com/support/pages/release-life-cycle>

IBM i 以外のSWのライフサイクル (個別検索)

<https://www.ibm.com/support/pages/lifecycle/>

IBM Power Systems Virtual Server 情報

<https://ibm.biz/pvsjapan>



ワークショップ、セッション、および資料は、IBMによって準備され、IBM独自の見解を反映したものです。それらは情報提供の目的のみで提供されており、いかなる読者に対しても法律的またはその他の指導や助言を意図したのではなく、またそのような結果を生むものでもありません。本資料に含まれている情報については、完全性と正確性を期するよう努力しましたが、「現状のまま」提供され、明示または暗示にかかわらずいかなる保証も伴わないものとします。本資料またはその他の資料の使用によって、あるいはその他の関連によって、いかなる損害が生じた場合も、IBMは責任を負わないものとします。本資料に含まれている内容は、IBMまたはそのサプライヤーやライセンス交付者からいかなる保証または表明を引き出すことを意図したもので、IBMソフトウェアの使用を規定する適用ライセンス契約の条項を変更することを意図したものでなく、またそのような結果を生むものでもありません。

本資料でIBM製品、プログラム、またはサービスに言及していても、IBMが営業活動を行っているすべての国でそれらが使用可能であることを暗示するものではありません。本資料で言及している製品リリース日付や製品機能は、市場機会またはその他の要因に基づいてIBM独自の決定権をもっていつでも変更できるものとし、いかなる方法においても将来の製品または機能が使用可能になると確約することを意図したものではありません。本資料に含まれている内容は、読者が開始する活動によって特定の販売、売上高の向上、またはその他の結果が生じると述べる、または暗示することを意図したもので、またそのような結果を生むものでもありません。パフォーマンスは、管理された環境において標準的なIBMベンチマークを使用した測定と予測に基づいています。ユーザーが経験する実際のスループットやパフォーマンスは、ユーザーのジョブ・ストリームにおけるマルチプログラミングの量、入出力構成、ストレージ構成、および処理されるワークロードなどの考慮事項を含む、数多くの要因に応じて変化します。したがって、個々のユーザーがここで述べられているものと同様の結果を得られると確約するものではありません。

記述されているすべてのお客様事例は、それらのお客様がどのようにIBM製品を使用したか、またそれらのお客様が達成した結果の実例として示されたものです。実際の環境コストおよびパフォーマンス特性は、お客様ごとに異なる場合があります。

IBM、IBM ロゴ、ibm.com、Db2、Rational、Power、POWER8、POWER9、POWER10、AIXは、世界の多くの国で登録されたInternational Business Machines Corporationの商標です。

他の製品名およびサービス名等は、それぞれIBMまたは各社の商標である場合があります。

現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

インテル、Intel、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Centrino、Intel Centrino ロゴ、Celeron、Xeon、Intel SpeedStep、Itanium、およびPentium は Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linuxは、Linus Torvaldsの米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは Microsoft Corporationの米国およびその他の国における商標です。

ITILはAXELOS Limitedの登録商標です。

UNIXはThe Open Groupの米国およびその他の国における登録商標です。

JavaおよびすべてのJava関連の商標およびロゴは Oracleやその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。